



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

デンマークにおける重度障害の子ども・若者の生活  
ケアと発達支援：  
コペンハーゲンの重度障害居住施設「障害児センタ  
ー・白鳥の家」の訪問調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智, 石井, 智也, 田部, 絢子, 石川, 衣紀, 能田, 昂, 内藤, 千尋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/152420">http://hdl.handle.net/2309/152420</a>

# デンマークにおける重度障害の子ども・若者の生活ケアと発達支援

—— コペンハーゲンの重度障害居住施設  
「障害児センター・白鳥の家」の訪問調査から ——

高橋 智\*<sup>1</sup>・石井 智也\*<sup>2</sup>・田部 絢子\*<sup>3</sup>・  
石川 衣紀\*<sup>4</sup>・能田 昴\*<sup>5</sup>・内藤 千尋\*<sup>6</sup>

特別ニーズ教育分野

(2019年9月17日受理)

## 1. はじめに

本稿では、デンマーク・コペンハーゲン市にある「障害児センター・白鳥の家 (Center for Børn med Handicap Svanehuset)」(写真1)の取り組みを通して、デンマークにおける重度障害を有する子ども・若者の生活ケアと発達支援を紹介する。

日本ではグループホーム増設などの脱施設化が進められてきたが、サービスの質の低下やスタッフの低い専門性について問題視されており、重度障害児者の「QOL (生活の質)」が十分に保障されているとはいえない。デンマークでは重度障害を有する子ども・若者と成人の支援に関わって「生活条件を可能な限り通常の生活条件に近づける」脱施設化・ノーマライゼーションが進められてきたが、それとともに生活支援員の配置を促し、重度障害を有する子ども・若者と成人の発達や人間的な生活を重視するなどのQOL (生活の質)の向上が目指されてきた。

筆者らは2019年3月に「障害児センター・白鳥の家」に訪問調査した。「障害児センター・白鳥の家」では、重度の知的障害・身体障害・精神疾患等を有する子ども・若者への24時間体制の生活ケアと発達支援が、重度障害を有する子ども・若者の「学習・発達・自立・QOL・健康」を軸にして提供されている。

なお、「障害児センター・白鳥の家」の訪問調査に際しては、事前に「白鳥の家」の管理職に「調査目的、調査内容、調査結果の利用・発表方法、個人情報保護、研究倫理」等についての文書を渡して検討していただき、調査についての了解を得ている。

---

\*1 東京学芸大学特別支援科学講座特別ニーズ教育分野教授 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)  
\*2 日本福祉大学スポーツ科学部助教・2018年度連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座修了  
\*3 立命館大学産業社会学部准教授・東京学芸大学非常勤講師・2012年度連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座修了  
\*4 長崎大学教育学部准教授・2012年度連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座修了  
\*5 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座・尚絅学院大学総合人間科学系助教  
\*6 松本大学教育学部専任講師・2017年度連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座修了



写真1 障害児センター・白鳥の家 (Center for Børn med Handicap Svanehuset)

## 2. デンマークにおける重度障害の子ども・成人の生活ケアに関わる法制度

デンマークではノーマライゼーションの考えの下に福祉国家として発展してきており、身体・精神面において様々な違いがあっても、人間としては平等であり、社会的・政治的にも平等であることが大切にされてきた。

1980年以降、大規模な入所施設であった国立の知的障害者コロニーや精神病院などが地方自治体に移管され、多くの重度障害を有する子ども・成人が地域に分散された小規模の入居施設や通所施設に移ることになるが、地域に移住しても地域住民と交流はなく、余暇を楽しめる環境が整備されていなかったこと、とりわけ重度障害を有する子ども・成人の場合には、余暇活動や住民との交流、社会参加の困難さが顕在化した(片岡：2009)。

こうした背景から、市民が抱える様々な生活上の困難に対しては、公的部門が生活支援を実施するという社会連帯の考えに基づいて、重度障害を有する子ども・成人が地域で生活できるように、一般市民とほぼ同じ生活水準を保てる収入が保障されるとともに、補助器具、送迎・同行サービス、住宅改良、教育、リハビリテーション、余暇活動などの様々な生活ケアが公的援助として個人負担なしで提供されることとなった。加えて重度障害に対しては、居住施設のなかで音楽、乗馬、水泳、スヌーズレンなどの感覚刺激を通して、QOL(生活の質)を高める様々な取り組みもなされてきた(片岡：2009)。

1993年のデンマーク議会で「障害者の機会均等と平等な取り扱い」が決議され、障害者のニーズに関係する各部門の責任分担や平等な処遇・平等な地位の確保、社会連帯の重要性が強調された。とりわけ「補充性の原則」(障害をもつ子ども・成人が自分の能力を最大限発揮してもなお普通の生活を維持できなくなった部分を補充する)が重視されるなど(野村：2010)、デンマークの障害をもつ子ども・成人の特別ケアにおいては「生活条件を可能な限り通常の生活条件に近づける」ノーマライゼーションが推進されるとともに、重度障害も含めて多様なニーズをもつ子ども・成人に対して自身の能力を最大限に高めQOL(生活の質)を改善させる対応が強調された。

1998年に成立した「社会サービス法(Lov om social service)」では「身体的・精神的機能能力の低下、特別な社会的問題のある子ども・成人のために特別な対応を実施しなければならない」と規定され、「子ども」「高齢者」「障害者」をはじめとして、ホームレスやDVを受けた女性など、通常の市民と同様の生活を行うのに困難があるすべての人を対象とし、各種のニーズに応じた生活支援を国民すべてに適應することが定められた。

社会サービス法の成立によって、公的部門や社会による多様な生活上の困難や支援ニーズに応じた特別な支援が実施されることで、多様な困難を抱える子ども・成人が通常の市民と同様な機会と可能性を得ること、対等な立場での社会参加を果たすというノーマライゼーションの理念が現実化・実質化していくことにつながっていく。

### 3. 多様な困難をもつ子ども・若者の家庭外ケア

デンマークでは子どもの権利保障の一環として子育て支援策が重視されており、女性が労働市場に出ることを前提とした普遍的な保育サービスのうえに、ひとり親家庭への特別手当や低所得家庭に対する保育料軽減等、貧困に陥る可能性がより高い家庭に対しては集中的支援が行われたうえで、家庭や生活に困難を抱える子ども・若者への特別なケアが実施されている。

社会サービス法第11章では、多様なニーズをもつ子ども・若者に対する「継続的な育成と安全なケア、大人との親密な安定した関係性の提供」「自己啓発の機会の保障と社会関係やネットワークに参加する能力の構築」「学校教育と教育を修了できるようなサポート」「健康と幸福の促進」「自立した大人の生活の準備」が定められている。

こうした目的を達成するために自治体（コムーネ：Kommune）の責任のもとで、多様な困難を抱える子ども・若者のニーズ調査を実施したうえで、提供するサービスが策定される。家庭や生活に困難をもつ子ども・若者やその家族に対して、子どもが在宅したままで生活を立て直すことができるように、一時的に子どもの世話をを行う「レスパイトケア」や定期的に子どもや母親の相談にのり、アドバイスを行う「コンパクトパーソン」の派遣、「カウンセリング」などの予防的ケアが実施されている。

こうしたケアに加えて、とりわけ心理・精神面において大きな困難を抱える子ども・若者に対しては、承認された居住施設でのケアに措置されるケースが少なくない。こうした居住施設におけるケアは、デンマークでは「発達や教育や子どもの適切なケアを含む積極的な養護」として捉えられ、子ども・若者の生活と発達を保障するうえで重要な支援として捉えられている（佐藤：2014）。

こうした居住施設は「社会教育的施設（socialpædagogisk opholdssted）」と「養護施設（døgninstitution）」に分けられる。「社会教育的施設（socialpædagogisk opholdssted）」は民間の家庭規模の居住施設（小規模ホーム）であることが多く、大人との緊密で安定した関係が必要な子ども・若者のニーズに応じて、社会的関係とネットワークを構築する方法について学ぶ機会を与えている。

「養護施設（døgninstitution）」は日本の児童養護施設とは異なり、「乳幼児のニーズを査定する施設」「子どもの学校問題に特化する施設」「反社会的行動・非行を行う子どもの施設」「行動的・精神的・感情的な困難をもつ子どもの施設」「保護者や家庭のレスパイトを強調した施設」など、多様な生活・発達上の困難をもつ子ども・若者の居住施設のことを意味している。知的障害・身体障害・精神疾患などの障害を有する子ども・若者を対象とした居住施設も、このカテゴリーに含まれる。

こうした家庭外ケアに措置される子ども・若者の総数は11,049名（0-17歳）であり、「里親家庭」約60%、「養護施設（døgninstitution）」約20%、約15%が「社会教育的施設（socialpædagogisk opholdssted）」に措置され、デンマークでは家庭内ケアや「里親家庭」への措置以外にも、居住施設におけるケアの重要性が認識されてきたといえる（Social og Indenrigsministeriet：2017）。

重度の知的障害・身体障害・精神疾患等を有する子ども・若者に関しては、家庭問題の深刻化や不適切な養育（養育負担が大きく離婚に至ることや依然として虐待・ネグレクト等の問題が生じていること）によって、彼等の安心・安全な生活が保障されないことも少なくない。

こうした実態から、多くの自治体では「デイケア・サービス」「コンタクトパーソン」「カウンセリング」などの家庭サービスとともに、「養護施設（døgninstitution）」における特別ケアの一環として、重度の知的障害・身体障害・精神疾患等の子どもの居住施設におけるケアが取り入れられ、児童精神医学やソーシャルペダゴジーの取り組みを含めた多様な生活ケアと発達支援がなされてきた（Socialstyrelsen：2018）。

デンマークでは養育困難・虐待・ネグレクト等に晒された子ども・若者に対して家庭外での居住施設におけるケアが古くから実施されてきたが、とりわけ生活・発達上の困難が深刻化しやすい発達障害・知的障害・精

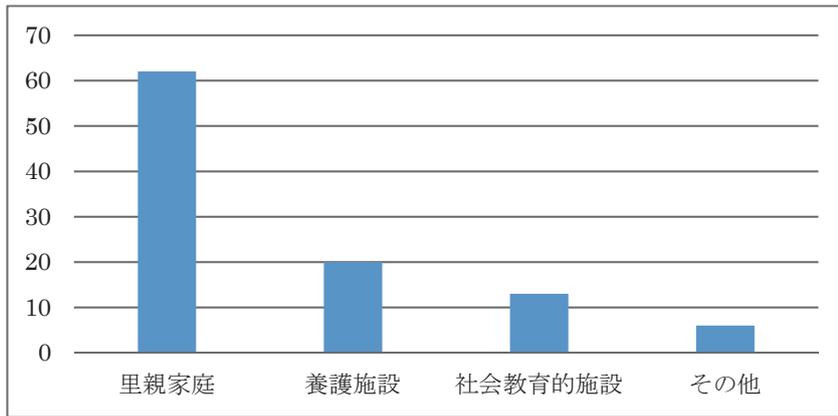


図1 家庭外ケアの措置を受けた子ども・若者（0－17歳）の内訳  
 (出典：社会・内務省 Social og Indenrigsministeriet ウェブサイト  
 (<https://sim.dk/arbejdsomraader/analyse-og-udvikling-af-data/noegletal/tal-paa-socialomraadet/>))

神疾患などの重度障害を有する子ども・若者に対してもその特性に応じて様々な発達支援が居住施設で実施されてきている。

#### 4. コペンハーゲンにおける重度障害の子ども・若者の生活ケアと発達支援

デンマークの首都・コペンハーゲンには「障害を持つ市民センター (Borgercenter Handicap)」が設置されている。障害をもつ本人やその家族からコペンハーゲン市に相談があった場合には、障害をもつ市民センターのスタッフが相談に応じたうえで、その子どもと家族のニーズに応じて「家族療法」「きょうだい児支援」「デイケアサービス」「コンタクトパーソン派遣」「障害児への集中的支援」「補助器具の提供」等を実施している。

多様な障害を有する子ども・成人の住居施設がコペンハーゲン市内に約25か所あるが、重度の知的障害・身体的障害・精神疾患等を有する子ども・若者への24時間体制の生活ケアと発達支援を実施している支援機関として「障害児センター (Center for Børn med Handicap)」がある。障害児センターには「Baunegård, Elmehuset, Nærumgård, Skovhusene, Svanehuset」の5つの居住施設があり、それぞれの居住施設は8名程度の少人数ユニットから構成され、対象の子ども・若者の障害種・支援ニーズによって支援体制・支援内容・他機関との連携体制が異なっている。

デンマークでは18歳以上になると「自立」した生活を送ることが社会通念上求められるために、上記の居住施設の入所期限も18歳までであることが多い。その後は「パーソナルアシスタント」制度をはじめとして「住宅サービス、送迎・同行サービス、リハビリテーション、余暇活動、補助器具」などの各種サービスを利用しながら、地域で自立した生活をおくる。

なお、18歳以降において、これまでのサービスが全く利用できないということはなく、「コンタクトパーソン」「自立支援プログラム」を利用しながら、自分に適した仕事や活動を見つけて、徐々に地域で自立できるようなサポートが継続される。

#### 5. 「障害児センター・白鳥の家 (Center for Børn med Handicap Svanehuset)」の取り組み

調査訪問した障害児センター「白鳥の家 (Svanehuset)」では重度障害を有する0歳～18歳までの子ども・若者(男性)24名が入所しており、障害種・支援ニーズによって3つの「ユニット (Dammen, Hatten, Stubben)」に8名ごと配置されている。

ユニットでは適切な家庭・生活環境が提供され、重度障害を有する子ども・若者のより良い暮らしが保障さ

表1 「障害児センター」の有する居住施設の概要

施設名	概要
Baunegård	・自閉症スペクトラム障害やその他の診断を受けた子ども・若者のための学校・治療センターを附設している。 ・6歳～18歳の子ども・若者を対象としており14名の子ども・若者が生活している（2名は問題行動が著しい）。
Elmehuset	・自閉症スペクトラム障害を持つ子ども・若者のための多様な形態からなる入所施設である。 ・「6～18歳の自閉症を対象としたショートステイ」「6～18歳を対象とした24時間入居の施設」「16～23歳の年長者を対象とした居住施設」から構成される。
Nærumgård	・自閉症スペクトラム障害や重度重複障害を有する0歳から18歳の子ども・若者を対象としている。
Skovhusene	・永続的で著しい機能的能力が低下している0歳～18歳の子ども・若者のためのショートステイ・サービスである。
Svanhuset	・自閉症スペクトラム障害、発達障害、精神疾患、身体障害のある子ども・若者のための入所施設である。 ・「自閉症と知的障害を持つ子ども・若者」「重度重複障害をもつ子ども・若者」「通常の知的障害をもつ子ども・若者」が主なる対象である。

れることがめざされ、他の子ども・若者と同様の「教育・生活・余暇等の機会」を得ることができるような取り組みがなされている。

入所している子ども・若者は日中、近隣の特別学校に通学しており、それ以外の時間には「白鳥の家」において総数50名にも及ぶスタッフが生活ケアや発達支援を行っている。子ども・若者の日課や支援ニーズ等に応じて、「散歩、スポーツ活動、食事の用意、買い物、部屋の整理、洗濯、iPadの利用、映画鑑賞、音楽鑑賞、スタッフや友人と楽しい時を過ごす、水泳、様々な遊び」等が選択され、QOL（生活の質）の改善につながる取り組みがなされている。

子ども・若者は各自、自身の個室を有しており、自身の日課や生活リズムに応じて過ごすことができ、洗濯・部屋の整理整頓などはスタッフの協力を得ながらも、自分で考えて実施できるように促している。スタッフは「ペダゴグ（pædagog）」の資格をもち、障害児支援の経験を有している。

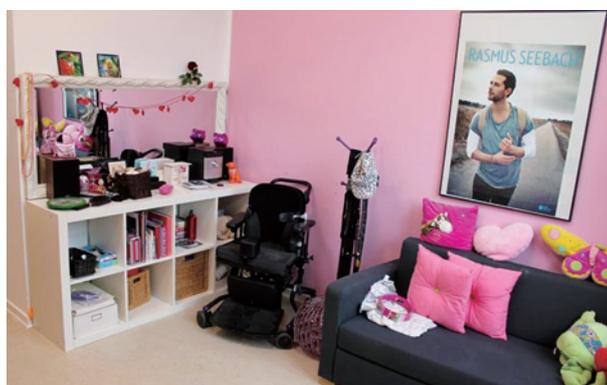


写真2 Dammenユニット入所者の個室  
<https://cbh.kk.dk/artikel/dammen>



写真3 Dammenユニットのリビングルーム  
<https://cbh.kk.dk/artikel/dammen>

入所している子ども・若者の多くは複雑な家庭背景や多様な生活困難を有している。例えば、保護者が精神障害・依存症を抱えている、虐待・ネグレクトが顕在化しているなど、家庭の生活問題が深刻化していることが多く、自傷・他害・暴力などの子どもの問題行動も看過できない状態である。

こうした状況に対してスタッフは、問題行動の背景にある子ども・若者の多様な生活や発達上の困難を探り、子ども・若者の新たな能力や可能性を見つけて、その成長・発達を促す取り組みを行っている。こうした取り組みを通して、子ども・若者は徐々に安心感やスタッフに対する信頼感を形成し、他の子ども・若者との生活を営めるようになっていくことが示されている。

入所している子ども・若者の多くは家庭における生活問題も深刻化していることが多いために、入所者の保護者や家庭への支援にも積極的に取り組んでいる。そのために保護者や家庭との情報共有や連携に注力し、「年次総会」等の保護者・家族を交えたミーティングを定期的実施している。なお、「白鳥の家」には保護者・家族が子ども・若者とともに過ごすことのできる「ファミリールーム」を有しており、家族との関係を回復したうえで、地域で自立できるような取り組みが実施されている。

さて、少人数ユニットの一つである「Dammen」には、重度の認知機能障害（2～3か月から就学前年齢の機能レベル）ほか複数の障害を有する子ども・若者8名が生活している。彼らは多様な発達困難を抱えているために日常生活のすべてにおいて活動をサポートする必要があるが、スタッフは子ども・若者と向き合いながら、彼らの潜在的な可能性に着目し、家庭的な生活を作り出すことを大切にしている。

「Dammen」の子ども・若者はスタッフとコミュニケーションをとるために、PODDブック（Pragmatic Organisation Dynamic Display book）、会話カード、質問テクニック、触覚サイン、iPad、言語ガイダンスなどの様々なコミュニケーション支援機器を利用している。また、彼らは各種の視覚困難を有しているため、光源・色・装飾等のインテリアデザインの選択においても配慮がなされているとともに、スノーズレン・アプローチから着想を得た光・音・動きなどの刺戟の可能性を用いた取り組みも実施されている。



写真4 Dammenユニットに入所している子ども・若者の様子  
<https://cbh.kk.dk/artikel/dammen>



写真5 利用されているコミュニケーション・ツール

「Hatten」ユニットには、脳性マヒ、クリドーチャート症候群（ネコなき症候群）、ADHD、ASD、ダウン症候群などの障害を有する8名の子ども・若者が生活をしている。すべての子ども・若者には知的な遅れ（1歳から就学前年齢の機能レベル）があり、不均一な発達プロフィールが見られ、またてんかん、視覚障害、聴覚障害などを併せて有している。

ここで生活する子ども・若者は、前述したコミュニケーション・ツールを利用するとともに、話し言葉やボディーランゲージ、サウンド、イメージ・画像などを用いながらコミュニケーションをとっている。

「Stubben」ユニットで生活する子ども・若者は、大きな精神的困難を抱えている。こうした困難の多くは広汎性発達障害や認知機能障害を中核として現れることが多いが、必ずしも診断は必要ではない。「Stubben」ユニットで生活する子ども・若者には高度の併存疾患（注意障害、遂行機能障害、記憶障害、不安、ストレス症状、強迫状態、反復的儀式的行動、行動障害、感情障害、愛着障害、虐待的な振る舞い等）を有するが、その背景には、養育放棄・虐待等の不適切な生活家庭環境とそのため子ども・若者が抱える強い「不安・緊張・怖れ・抑うつ・ストレス」等がある。

とくに、精神的困難が非常に顕著な場合には、他者との適切な関係性や安定した自尊心を構築することが課題となる。精神的困難を抱えている子ども・若者は他者との関係性の構築に大きな困難を抱えているため、日々の生活のなかで自己認識や感情調整する能力を伸ばし、自尊心が高められるように発達を促進している。そのためには、子ども・若者の安心・安全や身体的健康、コミュニケーションの保障に関わる生活環境を保障し、子ども・若者が自身の課題に向き合うことができるようすることが不可欠とされている。



写真6 Stubbenユニット入所者の個室  
<https://cbh.kk.dk/artikel/stubben>



写真7 Stubbenユニットにおける鶏の飼育  
<https://cbh.kk.dk/artikel/stubben>

## 6. 重度障害対象の特別学校「Øresundsskolen」との連携

コペンハーゲンの障害児センターのなかで「Baunegård」と「Elmehuset」はASDを有する子ども・若者の中

心とした居住施設であり、施設内に教育機関が附設されているが、その他の施設では入所している子ども・若者は近隣の特別学校 (Specailskole) や国民学校 (Volksskule) の特別クラスに就学している。

「白鳥の家」に入所の子ども・若者の多くは、同じØsterbro 地区にあるØresundsskolenに通学している。Øresundsskolenは知的障害・自閉症・身体障害等の重度重複障害の子どもが通う特別学校 (義務教育10年) であり、学童保育 (SFO) が併置されている。



写真8 Øresundsskolenの外観

Øresundsskolenの学校職員は教師40名、ペダゴグ35名、専門職員 (心理士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、ヘルスケアプロバイダー等) であり、全員が正規雇用である (勤務時間は各自異なるが時間給は職種により同じ)。ペダゴグ (Pædagog) は、保育園・学校の就学前学級・学童保育・特別学校等で保育・生活指導・教育支援などを担当する専門職である。

全校の子ども数は117名であり (2019年現在)、1クラスあたり4~7人程度が在籍している。子どもの障害の状態によって「重度重複障害、自閉症、その他」の3グループに分類される。デンマークではインクルーシブ教育の促進にともない軽度・中度障害の場合は国民学校で教育を受けることを基本としており、重度重複障害の場合に特別学校で教育を受けることになる。Øresundsskolenに在籍する子どもの約60%は移民等のため、彼らは障害に伴う学習困難に加えて「外国語」であるデンマーク語で教育を受けることが求められているため、より丁寧な教育が行われている (高橋・田部:2018, 田部ら:2019)。

Øresundsskolenの教育活動では、子どもの発達を最大限に促すために「多様なコミュニケーションの形態を強化」「重度障害の子どもたちの身体意識および運動発達を促進」「文化的教育活動および音楽教育」に力を入れている。さらに、自己管理能力と自己認識を強化するために「子どもの自発的なイニシアチブと自分のニーズを表現する機会を促進すること」「自己選択・自己決定を基本とすること」「子どもの好奇心を刺激して積極的な参加を促すこと」に重点が置かれている。

「白鳥の家」に入所して特別学校への転校を余儀なくされると、大きな挫折感を味わう子ども・若者も少なくない。そうしたフォローを行うために、障害児センターのスタッフが特別学校を訪問して連携を行いながら、特別学校と「白鳥の家」の双方において子ども・若者の発達支援を実施している。遠方の学校の場合には電話でコンタクトをとり、必要があればミーティングも実施する。

## 7. おわりに

本稿では、デンマーク・コペンハーゲン市の「障害児センター・白鳥の家」の取り組みを通して、デンマークにおける重度障害を有する子ども・若者の生活ケアと発達支援の特徴について検討してきた。

ノーマライゼーションやインクルージョンに早くから積極的に取り組んでいるデンマークにおいても、重度の知的障害・身体障害・精神疾患等を有する子ども・若者に関しては、家庭問題の深刻化や不適切な養育 (養

育負担が大きく離婚に至ることや依然として虐待・ネグレクト等の問題が生じていること)によって、彼等の安心・安全な生活が保障されないことも少なくない。

それゆえにデンマークにおいても、重度障害を有する子ども・若者の生活ケアと発達支援に取り組む「白鳥の家」のような居住施設のニーズは大きいことが明らかとなった。

「白鳥の家」では、重度障害を有する子ども・若者に安心・安全な生活環境を保障し、彼らの支援ニーズに応じた生活ケアや発達支援を継続して実施しているが、その取り組みを通して、子ども・若者の生涯にわたるQOL(生活の質)と発達を保障していることが大きな特徴として示された。

## 文献

池田法子(2018)デンマークにおける特別なニーズのある若者教育政策の展開—特別計画若者教育(STU)を中心に—,『京都大学大学院教育学研究科紀要』第64号, pp.29-41。

片岡豊(2009)デンマークにおける障害者の「自立」の考え方—政治と倫理—,『海外社会保障研究』第166号, pp.26-37。

野村武夫(2010)『「生活大国」デンマークの福祉政策—ウェルビーイングが育つ条件—』ミネルヴァ書房。

佐藤桃子(2014)デンマークにおける子どもの社会的養護—予防的役割の必要性—,『年報人間科学』第35号, pp.53-71。

社会庁(socialstyrelsen)ウェブサイト: <https://socialstyrelsen.dk>。

社会庁(socialstyrelsen)(2018) *Døgninstitution* <https://socialstyrelsen.dk/born/anbringelse/om-anbringelse/anbringelsesformer/dogninstitution>

社会・内務省(Social og Indenrigsministeriet)ウェブサイト: <https://sim.dk/>。

社会・内務省(Social og Indenrigsministeriet)(2017) *Sociale nøgletal: Udsatte børn og unge* <https://sim.dk/arbejdsomraader/analyse-og-udvikling-af-data/noegletal/tal-paa-socialomraadet/>

障害児センター(Center for Børn med Handicap)ウェブサイト: <https://cbh.kk.dk/>。

障害を持つ市民センター(Borgercenter Handicap)ウェブサイト: <https://www.kk.dk/bch>。

田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・高橋智(2019)北欧における特別学校と障害の重い子どもへの取り組み—スウェーデン・デンマークへの訪問調査を通して—,『東京学芸大学紀要総合教育学系 I』第70集, pp.235-246。

高橋純一(2017)インクルーシブ教育の再考—日本とデンマークにおける特別支援教育の比較を通して—, 谷雅泰・青木真理編著『転換期と向き合うデンマークの教育』ひとなる書房, pp.101-130。

高橋智・田部絢子(2018)デンマークの重度障害特別学校の実践—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑩—,『内外教育』第6656号, pp.12-15, 時事通信社。

高橋智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋(2018)デンマークにおける障害者の生涯学習—北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑪—,『内外教育』第6661号, pp.12-15, 時事通信社。

# デンマークにおける重度障害の子ども・若者の生活ケアと発達支援

—— コペンハーゲンの重度障害居住施設  
「障害児センター・白鳥の家」の訪問調査から ——

## Life Care and Developmental Support for Children and Youth with Severe Disabilities in Denmark:

From a Visiting Survey to Residential Facility for Children and Youth with Severe Disabilities, “Center for Børn med Handicap Svanehuset” in Copenhagen

高橋 智\*<sup>1</sup>・石井 智也\*<sup>2</sup>・田部 絢子\*<sup>3</sup>・  
石川 衣紀\*<sup>4</sup>・能田 昂\*<sup>5</sup>・内藤 千尋\*<sup>6</sup>

TAKAHASHI Satoru, ISHII Tomoya, TABE Ayako,  
ISHIKAWA Izumi, NOHDA Subaru and NAITOH Chihiro

特別ニーズ教育分野

### Abstract

In this paper, we introduced the life care and developmental support for children and youth with severe disabilities through the visiting survey to residential facility for children and youth with severe disabilities “Center for Børn med Handicap Svanehuset” in Copenhagen, Denmark.

Even in Denmark, which has been actively working on normalization and inclusion from an early stage, children and youth with severe intellectual disabilities, physical disabilities, mental illnesses, face to lack of secure and safe life because of their family problems and inappropriate childcare in many cases, divorce and problems such as abuse and neglect.

It was clarified that there were great needs for residential facilities such as the “Svanehuset”, which was engaged in life care and developmental support for children and youth with severe disabilities in Denmark. The “Svanehuset” guarantees safe and secure life for children and youth with severe disabilities and continues to provide life care and developmental support according to their support needs. It was a major feature that guarantees the quality of life and development of children and youth.

**Keywords:** Denmark, residential facility for children and youth with severe disabilities, Life Care, developmental support

*Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

---

\*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

\*2 Nihon Fukushi University (Okuda, Mihama-cho, Chita-gun, Aichi, 470-3295, Japan)

\*3 Ritsumeikan University (56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577, Japan)

\*4 Nagasaki University (1-14 Bunkyo-machi, Nagasaki-shi, Nagasaki, 852-8521, Japan)

\*5 United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University / Shokei Gakuin University (4-10-1 Yurigaoka, Natori-shi, Miyagi, 981-1295, Japan)

\*6 Matsumoto University (2095-1 Niimura, Matsumoto-shi, Nagano, 390-1295, Japan)

**要旨:** 本稿では、デンマーク・コペンハーゲン市の「障害児センター・白鳥の家」の取り組みを通して、デンマークにおける重度障害を有する子ども・若者の生活ケアと発達支援の特徴について検討してきた。

ノーマライゼーションやインクルージョンに早くから積極的に取り組んでいるデンマークにおいても、重度の知的障害・身体障害・精神疾患等を有する子ども・若者に関しては、家庭問題の深刻化や不適切な養育（養育負担が大きく離婚に至ることや依然として虐待・ネグレクト等の問題が生じていること）によって、彼等の安心・安全な生活が保障されないことも少なくない。

それゆえにデンマークにおいても、重度障害を有する子ども・若者の生活ケアと発達支援に取り組む「白鳥の家」のような居住施設のニーズは大きいことが明らかとなった。

「白鳥の家」では、重度障害を有する子ども・若者に安心・安全な生活環境を保障し、彼らの支援ニーズに応じた生活ケアや発達支援を継続して実施しているが、その取り組みを通して、子ども・若者の生涯にわたるQOL（生活の質）と発達を保障していることが大きな特徴として示された。

**キーワード:** デンマーク, 重度障害居住施設, 生活ケア, 発達支援